

ボランテニア精神の源を訪ねて……⑤
海上信仰の仏像

日本における水難救済の歴史を、多彩な角度から検証する本シリーズ。今回は、古くから金刀比羅宮に祀られ、海上信仰の対象ともなった「十一面観音立像」をご紹介します。

◆ 観音さまのお顔 ◆

一般に観音さまのお顔は柔和で、優しい微笑みをたたえておりますが、金刀比羅宮に伝わる「十一面観音立像」は分厚い唇に吊り上った目尻、大きな鼻と、およそ我々が考える観音さまのイメージとは掛け離れたお姿です。ご覧になられた皆さんは、その異様な雰囲気戸惑ってしまうかもしれません。

しかしながら、優しさとは程遠い、荒々しくさえ見えるそのお顔に、何か例えようのない神秘性も感じられます。

◆ 神仏習合 ◆

十一面観音立像は、金刀比羅宮が金毘羅大権現と呼ばれていた時代、観音堂(現：三穂津姫社)のご本尊として祀られていました。

神社になぜ仏像があるのだろうか？と不思議に思われるかもしれませんが、明治時代まで、こんぴらさんでは神社とお寺が共存していました。これを「神仏習合」または「神仏混淆」といい、神さまと仏さまは同体とされたのです。

こんぴらさんは長らく“金毘羅大権

現”と称しておりましたが、この「権現」とは神さまのご称号=神号で、神さまが権(仮)の姿になって現れるという意味です。

◆ 仏像の造り ◆

さて、この仏像ですが、制作は平安時代、8世紀まで遡るとのことです。

造りはヒノキ、またはカヤの一枚から両腕を含めて彫り出した素木(しらき)造り。彫り口は、のみの痕が全身にみられる荒彫(あらぼり)風です。表面に銀泥で施された胸飾り、衣などの文様は、後世に補われたとみられています。

そして長い年月の中で、十一面あったお顔は、本体のお顔を残して失われ

てしまいました。悠久の歴史を感じさせる信仰遺物です。

◆ 海上信仰と観音霊場 ◆

また、観音さまは“海上信仰”と密接な関わりを持っています。

平安時代以降、海上はるか彼方の理想郷・観音浄土を希求する信仰が盛んとなり、全国各地の霊験あらたかな山々は観音さまの居所である補陀落(ふだらく)山に見立てられ、観音霊場となりました。

金刀比羅宮が鎮座します琴平山(象頭山)も、その特異な山容から瀬戸内海を航行する航海者の目印となり、海上信仰の聖地として崇められました。琴平

山も観音霊場と考えられていたのかもしれない。

金刀比羅宮には、まだまだ数多くの謎が隠されています。

◆ 執筆者 ◆



金刀比羅宮禰宜 琴陵 泰裕氏



「十一面観音立像」を正面から眺めたところ。



見る者を圧倒するような、威厳の感じられるお顔。



側面から見た様子。前後左右のお顔、十面が欠落している。